日０５－１１０

「人間の條件」　　✿✿✿✿✿

第１部＜純愛篇＞

第２部＜激怒篇＞

２００５（平成１７）年７月９日鑑賞＜シネ・ヌーヴォ＞

＜第１部・第２部の舞台は中国南満州の老虎嶺鉱山＞

映画の冒頭は、梶（仲代達矢）と美千子（新珠三千代）が雪の中を２人並んで歩くシーンから。時代は１９４３（昭和１８）年。日本敗戦の１歩手前だ。美千子は梶からの「結婚しよう」という言葉を待っているが、いつ召集令状が来るかもしれない状況下で、梶はそれをためらっていた・・・。

しかしそんな２人は今、老虎嶺鉱山に向けたトラックの上に。満鉄調査部勤務中に梶が書いた中国人労働者の労務管理についての論文が認められ（？）、召集免除と引きかえに、それを現地で実践せよということになったわけだ。しかして、第１部・第２部の舞台は中国南満州にある老虎嶺鉱山。ここでの一般工人と特殊工人を相手として、労務管理の仕事で見せる梶の生き方がテーマとなるわけだ。

＜主要な争点は？＞

現地監督の岡崎（小沢栄太郎）は、古屋（三井弘次）らとともに鉱山で働く現地人の一般工人たちに対して、過酷なノルマを課して、これを牛馬同然にこき使いながら、その利益をピンハネしていた。一般工人とは半（？）強制的に徴集した現地に住む中国人の労働者たちのことだ。しかし、老虎嶺鉱山の所長黒木（三島雅夫）は大きな見地から（？）それを黙認。しかし、中国人労働者を働かせるためには労働条件の改善が１番と考える梶は、彼らの抵抗の中、果敢に自説を実行した。これを支えたのが沖島（山村聡）や梶の部下の陳（石浜朗）だった。そんな梶の努力が少しずつ報われ、２割生産増強の目標が達成された時、梶や沖島には新たな難問が・・・。

＜一般工人と特殊工人＞

それは憲兵の渡合（安部徹）からの「中国人捕虜６００名を払い下げる」というありがたい（？）お達し。これが「特殊工人」と呼ばれる人たちだ。輸送列車の中にぎゅうぎゅうに詰め込まれた捕虜たちは、飢えのために息も絶え絶えの状態。こんな捕虜たちを２３００ボルトの電流を流した鉄条網の中に入れ、強制労働に従事させるのは並大抵の苦労ではない。渡合からの指示は「殺してもよい。しかし決して脱走させないこと！」という非人間的なものだった。そのうえ黒木所長からの指示は、捕虜の適切な管理のため梶に「女郎屋のおやじ」も同時にやれというありがたいもの・・・？梶は休暇も取らず、懸命に人間としての尊厳を保つべく、この特殊工人管理の仕事に取り組んだが・・・？

＜特殊工人と娼婦との恋、そして脱走事件＞

特殊工人たちのリーダーである王享立（宮口精二）ら数名のリーダーたちとの「対話」を通じて信頼を獲得しようと努力する梶だったが、強硬派一辺倒の男がどこにでもいるもの。その最先鋒が高（南原宏治）だった。ところがそんな高と特殊工人の慰問（？）に訪れた娼婦の楊春蘭（有馬稲子）との間に恋が芽生えたから不思議なもの・・・。

他方、朝鮮人の張命賛（山茶花究）は女郎屋の女将の金東福（淡島千景）と結託して一般工人や特殊工人の脱走ルートをつくり利益をピンハネしていた。そして梶が美千子の頼みを受け入れてはじめての休暇に臨んだ時、張たちが仕組んだ脱走事件が勃発！梶は休暇を投げ出して職場に戻ったが・・・？

＜遂に特殊工人たちが反乱＞

脱走はその後も再三くり返された。しかし、ある日脱走を企んでいた悪者たちの手違いによって、鉄条網の電流を切らないまま決行されることに。その現場に立ち会った陳は、悪党一味の圧力に屈して梶を裏切ったことへの良心の呵責から、自ら鉄条網に・・・。こんな大騒動中で仲間の信頼を失った高はそれを挽回すべく、ある日現場監督の岡崎に楯突いたため、反抗とみなされてしまった。そして、裁判も受けないまま、河野憲兵大尉（河野秋武）の命令によって、高ら７名は斬首の刑に処せられることに・・・。

＜梶の人間としての心の叫びは・・・？＞

この処刑は、剣の使い手自慢である憲兵隊の渡合の手によって実行されることになったが、その立会人を命じられたのは何と梶。多くの特殊工人たちが見守る中、梶はなすすべもなく、現場に立ちつくすだけだった。１人目の首を斬り、楽しげに部下に対して「やってみるか？」と水を向ける渡合。これはまるであの南京大虐殺での「百人斬り」の姿を彷彿させるもの・・・？

２人目の処刑が終わり、３人目は高。目隠しを拒否しながら最後まで反抗する高が遂に斬られた時、梶は思わず「やめてくれ！」と叫んでいた。そして、そのタイミングをうまく捉えた特殊工人のリーダー王享立の指揮するデモンストレーションによって、処刑は中止されることに。しかしその後に梶を待っていたものは・・・？それは、徹底した梶への拷問と、約束されていた徴兵免除の取消しという残酷なものだった。

２００５（平成１７）年７月１３日記

・総論

・第３部、第４部の評論

・第５部、第６部の評論